祭りのさまざま

柳田国男

五

日本民族の神々ほど、清浄を愛し穢れを憎みたまふ神様は、世界中どこを捜しても無いと云つてよい。火が穢れるといふことは外国人にはわかるまいが、単に自分が血の穢れ又は喪の穢れに触れてはならぬのみで無く、それに触れて来た人と同じ火を使ふと、もうそれだけでも神様に近よれなくなるのであつた。それ故に祭の日の前になると、家々は皆外から来る人を断つて、厳重な物忌を守つたのであるが、人が多く集まるとどうしても故障が起りやすい。それで祭に是非働かねばならぬ人だけは、別に離れて住んで何日かの間、謹慎してゐたのであつた。其謹慎の場所を精進屋又は御籠り所とも謂つた。御籠り所は臨時に仮屋を作ることもあれば、特に一軒の民家を清めて使ふこともあり、社務所や帳屋（ちやうや）といふものを、その為に建てゝ置く所もあるが、此頃ではお宮の拝殿に行つて籠る村が多くなつた。人の職業の為に働く用がふえて来て、おこもりの時間は段々と短くなつてゐる。しかし青年たちが昔の通りに、祭の前夜又は前々夜から、蒲団を持つておこもりに行く村は今でも多い。それは皆祭の物忌を厳重にせんが為である。老人や女たちは、祭の当日の朝のうちから参つて来る。それを日籠（ひごも）りといふのは、御籠りがもとは夜のものだつたからである。御籠りの人々は皆食物をきれいにこしらへ、神

酒を持つて来て、先づ初穂を神に上げて後に、それをめい／＼がいたゞき、且つ隣の人々と交換して食べる。つまりは神と人との共同の食事であつて、それが何物にもたとへられない楽しみであり、又いつまでも忘れ難い思ひ出であつたことは、決して私たち少年少女ばかりでは無かつたのである。

村の御社の小さい祭といふのは、もとはすべてこの御籠りの日であり、又お重詰めの開かれる日、大人のうれしさうに酒酌みかはす日でもあつた。しかし時候のよい春の末、山には藤躑躅、畠には青麦菜種、紫雲英が咲き雲雀の高く揚がる頃が殊に楽しかつた。さうして農家では田植ごもりとも謂つて、田の仕事に取掛る前の小祭が、最も大切に考へられてゐた。その以外にも雨が程よく降れば雨寵り又はおしめり正月、虫が附きさうなら虫祭なども臨時にあつて、おこもりのし方は皆よく似てゐた。

年籠りといふのは除夜の年取りの晩に、御社に行つて籠ることであつたが、是は寒い頃である為か、今では夜明け前にたゞ御参りする者が多くなつてゐる。しかしそれよりも少し前、冬至といふ日の後先に、御火焚きと称して御社の広庭に、大きな火を焚く祭が村々にはあつた。一日も早く春の陽気が来るやうにといふ、さそひのやうな意味が有つたのかも知れない。この火が燃え上がると、村中の子供が皆集まつて来た。さうして裸になつて相撲を取り、勝つても負けても御褒美を貰つた。この以外にも節供の日、月々の朔日と十五日、是は定まつた祭の日ではなかつたかも知れぬが、村中の人たちの気が改まつて、大抵同じ刻限に参つて来る。さうして御社にも灯明を上げ、御供

へ物が供へられてゐる。関東の方では御三日(おさんじつ)といひ、一日十五日の外に二十八日にも参つて来る。近頃では毎月の八日といふにも、お宮の拝殿に人が集まつて、色々と御国の事を話し合ふ。それがおのづからの祈願となつて、神さまの御心にも届くやうな感じが深い。

村の住民のめい／＼の祭も無いとは云へないが、人が大病になると一家一門、親しい友だちが一しよになつて参る。たつた一人で御百度を踏むといふやうなことは田舎には無い。子供が村に生れると氏子入りと謂つて、産屋(うぶや)の穢れの清まるや否や、人が抱いてお参りをさせる。大きな声で赤児の名を神に申し上げ、又は暫らく神前にねかせて置いて啼かせたりする。是だけは全く一家限りの祭のやうに見えるが、家からはお赤飯などをふかして持つて来て、椿の葉に載せて神に進め残りを少しづゝ村の子に分けて、是から友だちになつてもらふ。それがすぐ知れるので沢山の児童が、この日も御社に集まつてゐるのである。父母兄弟と共に住む家を除いては、御宮の拝殿が子供には最も親しかつた。生れて三十日から世間に出て行く日まで、ひまさへあれば始終こゝに来て遊んでゐたからである。私の部落の明神さんには、三抱へも有るかと思ふ楊梅(やまもゝ)の老木があつた。私が去つてから六十年近く、今でも村の児はこの樹の下に集まつて、まだろくに熟しもせぬうちから、あの楊梅の実を取つて食べてゐるさうである。小さい時には私などもさうしてゐた。村の子供と御宮との関係は、昔のまゝに続いてゐるやうである。

※入力は3枚目までです。

謝辞　この課題文は以下より抜粋して作成されています。

底本:「日本の名随筆44　祭」作品社

1986(昭和61)年6月25日第1刷発行

1999(平成11)年2月25日第11刷発行

底本の親本:「祭日考」小山書店

1946(昭和21)年12月

入力:門田裕志

校正:阿部哲也

2012年12月9日作成

青空文庫作成ファイル:

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫(http://www.aozora.gr.jp/)で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。